

庄屋の上には大庄屋があつて、二十いくつかの村をまとめていたんや。この大庄屋が都合の悪い時には、弥兵衛さまが大庄屋のかわりをしたこともあつたと。弥兵衛さまの家は、鯖江の殿様に何百両もの大金と、一時に二百六十俵の米をさしあげたこともあつた。

ところが、いいことは何時までもは続かなんだ。

落ち目になるとの、パタパタと家も土地も人手に渡つて、なんと水呑百姓になつてしまつた。

そこへ追い打ちをかけたのが、西袋でも何十人も飢え死にした天保の大飢饉や。弥兵衛さま一家も生きるか死ぬかの瀬戸際になつてしまつた。

これを聞いたお殿様は、昔世話になつたお礼に粉

二俵恵んでくださつたんやと。明治三十年ごろ一人暮らしのおばあさんが死んで、家は絶えてしまつたんや。はかないのう。

そやけど、弥兵衛さまが酒造りに使つたおいしい水は、今でもこんこんと湧き出している。



弥兵衛さまの持つていたごんぼ畑は、今も石ころひとつもなご畑やぞ。

長いこと口づてに語り継がれているうちに、「やへえさま」は「やべさま」となつてもたげど、山の中にはお墓もたつてゐる。高いところから西袋の移り変わりを眺めていられるんやろな。

38 お寺を守つた天神さま

もう二百年ほども前のこと、西袋の本定寺のいちようが黄色に色づいたころ、その美しさにそわれたのか、旅のお坊さんが、ふらつとたずねてきた。そして、えんがわで、ごえんさんのいれたお茶をいしそにのみながら、めずらしい話をはじめた。話はずんで「晩泊してもらつたお坊さん、筆をとり出して、「紙を下さらんか。お礼に一幅かきましよう。」といつた。

紙の上にくつと身をのり出したお坊さん、筆にたつぶり墨をぶくませると、さらさらと手に梅の小枝を持つた天神さまをかきあげた。腰に下げた小袋から「ハン」を二つとり出すと、ポンポン

と押し、

「とあ出来た。では、おいとまじや。」

と、去っていった。それは見れば見るほどみづとな絵で、お寺では掛物にして大事にしまっておいた。

それから何年かたって、西袋に火事があった。火は東の方からお寺に近づいてくる。いまにも本堂に燃え移ろうというとき、まっ白いころもを着た人が、本堂の横にすうっと立って火の手にむかって両手をあげた。すると火の勢いが急に静まり、みてる間に消えてしまったと。『えんさん、

「さて、あの方は……？ あつ、あの絵の天神さまや。」

と思ひあたった。

それからお寺では火ぶせの天神

さまとよんで、いっそう大切に

してきたといういふだ。



③9 臼すり岩と大ダヌキ

昔、西袋から小坂（河和田町）へ行く道は、山のすそに沿って細い道があるだけでした。その途中に、片方は山、片方は川の淵、近くには火葬場があつて、昼でもひっそりとしてうす暗い所がありました。

そこに人の背丈以上の、二つ重なった大きな丸い岩がありました。それがまるで臼をする石に似ていたので、臼すり岩と呼ばれていました。この岩のあたりに、タヌキが棲みついていて、夜、ここを通る者があると、この石が臼をするように、グルグル回るように見せかけるといふうわさが広まっていました。それで、夜おそくにここを通る人は、ほとんどありませんでした。

ある日の事、西袋のお百姓さんが、小坂の祭りに出かけていきました。ごちそうをよばれているうちに、すっかり帰りが遅くなり、ほろ酔い気分での岩の下を通りかかりました。

「うまいべいっつおやっとな。家で待っているおっかあやごもらにも、早う食べさせてやりてえ。」